

私の父親は私が産まれるずっと前からギター弾きだった。レコード会社に所属するとか演奏会で世界を飛び回るようなプロではない。かと言ってただ家の中で弾いて満足するようなアマチュアでもない。役所に勤めるかたわら、毎土曜日ギター教室を開き数十人の生徒を抱えていたのだから「セミプロ」という位置付けが言葉の上では正しいのかもしれない。幼いころそのギターの音色を聞いて私は育った。

しかしちようど私が十歳になるころ、どうしたわけか父は突然ギターを弾かなくなってしまった。愛用していたギターはケースに収められ、私がおもちゃにしていた子供用ギターをチューニングするときだけがギターに触れる唯一の瞬間となってしまう。当たり前のようにいつも聞こえていた「アルハンブラ宮殿の思い出」や「アストウーリアス」が消えてなくなったのだ。

それから十年経ち、ちようど私が成人したころ、父にどうしてギターをやめたのかたずねたことがある。父はそれに素っ気無くこう答えた。

「あれ以上うまくなる見込みがなかったから、いやになっただ」

私は三十歳を過ぎ子供がいる身になってはじめて、それがひどく残酷な質問だったことに気づいた。当時、つまりギターをやめたころ、父は何を差し置いても私を含めた三人兄弟と母を養わなくてはならなかった。勤め

ていた役所では徐々に責任が増し、生活の中で仕事へのウエイトはどんどん高くなる。しかしクラシックではギターを一日でも弾かないとみるみる腕がなまってしまおうという。あんなに没頭してきたギターだからこそ、いい加減に続ける自分が許せなくなったのだろう。週に一度のギター教室だけで生計を立てるのはとうてい不可能だし、かと言ってただの趣味にしてしまうにはあまりにギターにいれ込んでいた。そうして父は四十を前に、ギターをすっぱりとあきらめたのだ。

それから二十年、父が還暦を迎えた年に私はあえてギターを買わないかとすすめることにした。たまたまメキシコ人の友だちが、職人手製の素晴らしいギターを紹介してくれたのだ。共鳴板の穴の部分が凝ったハート型（メルヘンチックというよりはシャープな）をしていて、そのまわりに施されたナカール貝細工が緻密で美しい。低音のびりびり響く、世界でたった一本のギターをぜひ父に弾いて欲しい。そう考えると実家に電話せずにはいられなくなった。「必要ない」と一蹴される覚悟はできていたが、意外にも父は「いいギターを探していたのでぜひ譲って欲しい」と照れくさそうに答えたのだ。

それをきっかけにギター弾きとして二十年越しに復活した父。家にいる間は常にギターをかき鳴らすようになり、十八番にしていた曲の数々を思い出すのにもそれほど時間はかからなかった。正月に実家に帰ると片時

もギターを離そうとしない父の姿がそこにはあった。それはやっとの思いで手に入れた宝物を大事そうに抱える子供のようにだった。

ギターを再開して数ヶ月後、今度はジャズを弾くと言い出した。ジャズギターを習う私の弟に影響を受けたのだ。クラシックとは対照的に、即興で音の流れを作り上げていくジャズの自由度に惚れ込んだという。六十を過ぎて新しいジャンルに挑もうとする父は、そうすることと長いブランクを取り戻そうとしているのだろうか。

父の二十年前の選択　つまりギターをあきらめ勤め人に徹することはものすごく勇気のいる決断だったに違いない。もしかして続けていれば今ごろは……という仮定は失礼にあたるだろう。その後家族は平穩に二十年という月日を過ごし、父はその間無趣味のままであった。そして役所を勤め上げ、精神的に落ち着いた今だからこそ二十年にもわたった封印を解く決意をしたのだ。

はるばるメキシコから届いたギターを手に入れた父。あつという間に音の世界にのめりこんでいく白髪交じりのその姿を見るにつけ、私は二つの思いで胸がいっぱいになる。「復活してくれてよかったな」という思いと「後何年弾けるか逆算しているんだらうな」という思いで。